

---

## 特集 おなかの病気 ー最新の診断と治療ー

---

### 【巻頭言】

高山 哲 治 (徳島大学大学院医歯薬学研究部消化器内科学分野)

赤池 雅 史 (徳島大学大学院医歯薬学研究部医療教育学分野)

消化器病学において最近の診断・治療の進歩を表す代表的なものとして、C型肝炎治療が挙げられる。私が働き始めた1986年には、「輸血により感染する原因不明の肝炎」であり、非A非B肝炎と呼ばれていた。1989年にカイロン社がC型肝炎ウイルスを同定し、C型肝炎と診断することが可能となった。しかし、C型肝炎の診断は可能になったが、C型肝炎ウイルスにひとたび感染すると慢性化し、肝硬変を経て、やがて肝癌に至る不治の病であった。1990年代からC型肝炎に対するインターフェロン療法が始められたが、非常に副作用の強い治療であり、かつ治療効果(ウイルスの排除率)はわずか5~15%であった。その後、抗ウイルス剤であるリバビリンが開発され、50%を超えるようになったが、インターフェロンとの併用による副作用に悩まされた。しかし、2014年に承認されたダクラタスビル+アスナプレビルは、いわゆる Direct Acting Antivirals (DAA) 製剤であり、副作用がほとんどない画期的な経口薬による治療である。これらの薬剤のウイルス除去率 (SVR 率)

は90%以上となり、ほとんどのC型肝炎は治る時代になった。その後も、続々と同様のDAAが承認され、今では経口薬を3ヵ月間内服するだけでほぼ100%ウイルスを排除できるようになった。C型肝炎は、ウイルスの発見からわずか25年ではほぼ完治できる疾患になったことになる。今回の特集では、2016年2月14日に開催された市民公開講座(徳島医学会)で発表されたC型肝炎の最新の治療について紹介する。

そのほかにも、今回の市民公開講座では、消化器内視鏡を用いた最新の癌治療、とくに食道癌と胃癌の内視鏡治療の進歩についての講演が行われた。また、大腸癌や膵癌の新しい診断と治療に関する講演も行われた。今回の特集では、これらの講演内容についても紹介する。これらの新しい診断及び治療は、徳島大学病院を始め県内の病院において施行可能なものが多く、不明な点がありましたらいつでもご相談していただければと思っております。